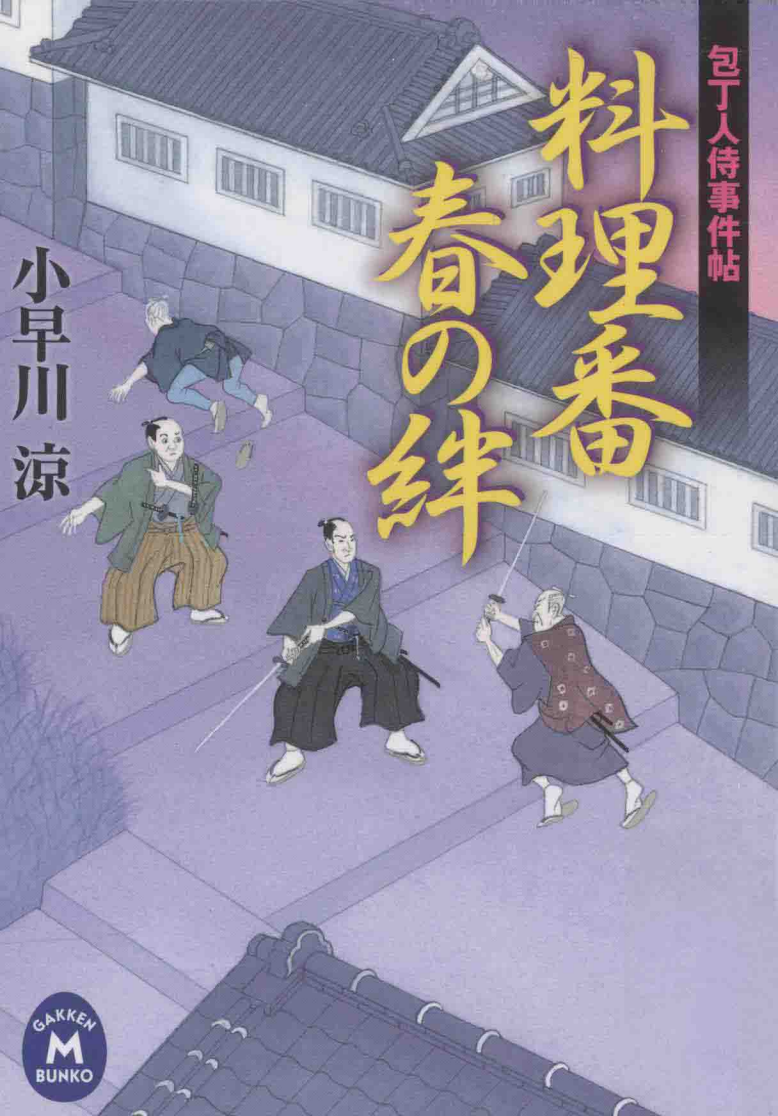
包丁人侍事件帖

料理番春の絆

小早川 涼



GAKKEN M BUNKO

八侍事件帖

料理番の春の絆

小早川 涼

常州大学図書館
藏書

学研M文庫

包丁人侍事件帖　料理番　春の絆

小早川　涼

学研M文庫

2011年5月24日　初版発行

発行人――土屋俊介
発行所――株式会社　学研パブリッシング
〒141-8412　東京都品川区西五反田2-11-8
発売元――株式会社　学研マーケティング
〒141-8415　東京都品川区西五反田2-11-8
印刷・製本―中央精版印刷株式会社
© Ryō Kobayakawa 2011 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。
★この本に関するお問い合わせは次のところへ。
• 編集内容に関することは――編集部直通　Tel 03-6431-1511
• 在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは――
販売部直通　Tel 03-6431-1201
• それ以外のこの本に関するお問い合わせは下記まで。
文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8
学研お客様センター『包丁人侍事件帖』係
Tel 03-6431-1002(学研お客様センター)
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。
本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。
複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。
日本複写権センター　TEL 03-3401-2382
Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉

こ-12-5

目次

第一話　義によりて　5
第二話　狸騒動（たぬき）　126
第三話　鷽替（うそ）え　193

八侍事件帖

料理番 春の絆（きずな）

小早川 涼

学研M文庫

此為試讀，需要完整PDF請訪問：www.ertongbook.com

目次

第一話　義によりて　5
第二話　狸騒動（たぬき）　126
第三話　鷽替（うそ）え　193

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

第一話　義によりて

一

文政四年（一八二一）の大晦。

御広敷御膳所台所人、鮎川惣介は、五つ半（午後九時前）を過ぎて、ようやく仕事場の御膳所を出た。

一日中、骨惜しみなくたっぷり働いた上に、最後まで残って竈の火の始末までした。結果、すっかり足が棒になり、特に役目を果たしたわけでもない腹の虫まで、くたびれ果ててめそめそとすすり泣いていた。

若手台所人を手助けしながら、十一代将軍、徳川家斉の朝、昼、夕の食膳を調製しただけではない。大豆を煎って春を呼ぶ節分の準備をしたのも、肉桂の皮や桔梗の根など決まりどおりの薬草を刻んで赤い絹袋に入れたのも、惣介である。

大豆は年男の老中の手で将軍のための「御休息の間」にまかれた。赤い絹袋は明日の朝、酒に入って屠蘇になる。

（中奥に正月を運んできた働き者よ、忠義者よ、と御祝儀をはずんでもらっても、ばちは当たらんぞ）

祝儀を請求するあてもないが、思うのは勝手だ。

そもそも城中には『大晦には老中と若年寄以外は登城に及ばず』との暗黙の了解がある。いわば幕臣の藪入りだ。とはいえ老中と若年寄だけでは、家斉をはじめ城中で暮らしている人々の身の回りの世話はできない。食事を準備する台所方も誰かが出番になる。

この出番、人手が少ないから地味なわりに忙しい。あまつさえ、家でゆっくり除夜を迎えたいのが人情だ。皆が嫌がる。結局、立場の弱い二十代の若手が仰せつかるものと相場が決まっている。

そんな当番を、年が明けると三十八歳になる惣介にわざわざ回して寄越したのは、御台所組頭の長尾清十郎だった。

（これで仕事仕舞い。あとはゆっくり寝正月ということなら文句もないが……）

明日も当番で、また夜も明けぬうちから起き出して登城しなければならない。これも長尾が決めたことだ。

普通なら台所人の勤めは一日当番で翌日は待機、二日非番の順で回ってくる。行事などの都合で二日つづきの出番となることもあるが、大晦と元日をつづけて働くのは若手台所人だけだ。

元はと言えば、冬の初めに惣介が勝手に早引けして長尾を怒らせた。その挙げ句の年をまたいだ当番である。重々承知してはいた。が、公に口には出せないものの、その早引けには惣介なりの言い分があった。少しは察してくれてもよさそうなものだと思う。

（組頭の石頭で火鉢をこしらえて、炭をぼんぼんくべてやったら、さぞかし体が温もって気も晴れるに違いない）

腹の内で悪態をつきながら台所門を出ると、冬の名残の北風がここぞとばかりに吹きつけて空きっ腹に凍みた。組屋敷のある諏訪町までが果てしなく遠く思われる冷え込みだ。歩くのも嫌になる。

「たこたこ、干だこ、上がったら焼いて食おう。下がったら煮て食おう。このまま御門に突っ立って、夜明かししたなら凍み豆腐、それ凍み豆腐」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

凧揚げの唄に勝手な文句をつけ足しておのれを励まし、肩を丸めて歩み出そうとしたとき、誰もいないと思い込んでいた門の中から吹き出すのを堪えたような声がかかった。

「惣介。子どもの頃はいつでも俺が凧の持ち役をしてやっただろう。まだ遊び足りんで凧を揚げたいのか」

声の主は即座にわかった。惣介の幼馴染み、片桐隼人だ。

隼人は添番を務めている。添番は大奥の暮らしの保安や警護が役目で、詰め所が御膳所と同じ御広敷の中にあった。

「ものを知らん奴だな。近松の心中ものにも凧のあれこれが出てくるほどだ。大凧を揚げて楽しむのは大人の領分さ」

「迂闊なことを言うな。すでになきに等しいとはいえ、大凧禁止の御法度はまだ出されたままだぞ」

「やれやれ、口うるさいことだ」

同い年で身分も同じ五十俵高の御家人だというのに、隼人はどうも兄貴風を吹かす癖があっていけない。

おまけに四十前にしてせり出し気味の腹に悩まされている惣介と違って、隼

人は、日々の鍛錬おさおさ怠りなし、と言いたげなすっきりと筋肉質の体つきをしている。これも何やら当てつけがましい。

さらに、切れ長な奥二重の目にすっきりと通った鼻筋にふっくらと穏やかな曲線を描く唇と、女がつい惚れそうな二枚目でもある。大きな団子の上に小さな団子を載せたような造作で、生まれてこの方ずっとしのいできている惣介からすれば、圧倒的に気に入らない。

「よう晴れておるなあ。明日は良い正月になりそうだ」

寒さにも惣介の虫の居所にもまるで頓着しない様子で、隼人は台所前三重櫓の上に広がる星空を仰いだ。

「ふん。空にどれだけ星があっても腹の足しにはならん。それよりおぬしは、年の終わりまで『揉めごとのぎゅう詰め』の世話か。ご苦労な話だな」

「また怖いもの知らずなことを。せめて城中では、ちゃんと『大奥』と言え」

「ははあ、『揉めごとのぎゅう詰め』を『大奥』のことだと決めつけたな。おぬしのほうが、よほど怖いもの知らずではないか」

隼人が涼しい目を悔しげに見開いた。それを心地よく眺め、並んで勝手放題しゃべり散らしながら平川御門まで来る間に、一日の疲れはずいぶんほぐれて

いた。

（言うてやって調子に乗せることもないが、やはり持つべきものは友だ）

惣介は何とはなく嬉しい気分になって、隼人の夜目にも若々しく整った横顔をちらりと見た。

隼人はここから代官町のほうに折れ、半蔵御門を通って四谷伊賀町へ帰る。惣介は雉子橋御門を抜けて飯田町に出る。たまに今夜のように下城の時刻が同じになったときは、たいてい竹橋御門のところで別れる形になるのだ。

「明日はどうせ寝正月なのだろう。ゆっくり休んで、雑煮は朝、昼、晩と十杯ずつ食え。それを三が日つづければ、俺のような立派な腹になれる。心して励めよ」

挨拶代わりに大食いを勧めて、返事も待たずに御用屋鋪の方向へ進み出したが、隼人は含み笑いのままついてきた。

「残念ながら俺も明日は登城せねばならん。新顔の訓導を任されてな。その者が明日、初めて御広敷に顔を出すのだ」

急な病気や死亡の場合を除いて、城中の各役目につく新人は正月明けにやって来る。不慣れな若い者たちを城に馴染ませ、仕事を教えて育てていくのも大

事な役目のうちだ。
たとえ新米でも、相手が大奥となると下手なしくじりは許されない。教えるほうも気を使うはずだ。
「添番の新顔は奥女中の格好の餌食だからなあ」
「それもある。が、今度来る者には少々込み入った事情があってな。そちらを案じておるのだ……まあ、よそう。いずれおぬしも顔を合わせるだろうし」
面倒見が良く新米の世話にも慣れているはずの隼人が、困った顔をしている。新しい添番はよほど面倒な問題を抱えているに違いなかった。
「それを話したくて……」
わざわざ遠回りをしたんじゃないのか。いくらでも相談に乗るぞ、とつづけかけたのをさえぎるように、道の向こう飯田町のほうから、闇を裂いてぞっとするような男の叫び声が聞こえた。
「俎板橋の方角だろう」
言うやいなや隼人が走り出した。隼人の速度についていけるはずもない。が、傍にいれば猫の手よりは役に立つ。惣介もどたばたと後につづいて駆けた。
人並みはずれて臭いに敏感な惣介の鼻は、すでに真新しい血の臭いを嗅ぎつ

けていた。

飯田町につづく通りと九段坂へ向かう道との十字路を右に折れる。背中に二人分の足音を聞いて振り返ると、田安御門の番所から羽織袴の番士が足軽を伴って九段坂を駆け下りてくるところだった。

盛大に白い息を吐きながらたどり着いてみると、俎板橋の脇で飯田町と書かれた提灯が揺れていた。掲げているのは若い番太郎だった。叫び声を聞きつけて自身番から走ってきたのだろう。まだ息が弾んでいた。

提灯の灯りは、草むらに転がった男物の草履と足袋をはいた足を照らし出す。痩せた小柄な町人のようだ。堀から吹き上がる冷たい北東の風が、鮮血の臭いとともに、かすかな墨の匂いを辺りに散らしていた。どちらも倒れた男から漂ってくる。

隼人は賊を追っていったものか、近くにはいなかった。

「医者を呼びに行くか」

惣介の問いに、番太郎は首を横に振った。

「ひどい傷で、すでに事切れております。四方に響いたのは断末魔の声だったのでございましょう」

はしこそうな番太郎はここまでを惣介に向かって答えると、田安御門の番士に向けてあとをつづけた。

「下手人らしき者をお見かけではございませんか。手前も自身番からここまでの間、辺りに気をつけながら参りましたけれど、逃げ去るような足音にも静かに歩く影にも出会うてはおりません」

「九段坂の方向にも人の気配はなかった」

当番大名の家臣である中年の番士が、太いしっかりした声で請け合った。

武家地の周辺、それも大晦の夜ふけとあって人通りはほとんどない。返り血を浴びた者や挙動の怪しい輩は無論のこと、関わりのない通りすがりでさえ目につくはずだ。

雉子橋御門からの道には隼人と惣介がいた。叫び声を聞いたあとは、誰にも会っていない。飯田町から来た番太郎は人影や物音に気づかず、九段坂へとつづく通りは、田安御門の番士たちがふさいでいた。

となると下手人の逃げ道は、俎板橋を渡って左に曲がり堀留に至る道筋か、右に曲がって、旗本の白須家と大澤家にはさまれた横道を抜け今川小路に出るか、真っ直ぐ丹波園部の小出家上屋敷の白壁に沿って走るか、そのいずれかだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton